

第1回共進化セミナー

— 研究公正とガバナンスのありかたを問う —

日時：2022年1月24日（月）13:30-16:00

◇主催：国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター
「科学技術イノベーション政策のための科学」研究開発プログラム

◇Zoom ウェビナー開催 ◇定員 500 人 ◇参加費無料

お申し込み URL：http://form.jst.go.jp/enquetes/stipolicy_coevolution

受付〆切り
1/20(木)正午

【開催趣旨】

RISTEX「科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム」では、共進化をテーマとした取り組みが令和3年度から本格的にスタートしました。現在、2つのプロジェクトが文部科学省と連携する形で実施中であり、令和2年度採択のもの合わせ、3つのプロジェクトが「研究公正」をテーマに進行中です。この機会を捉え、「研究公正」をテーマにしたセミナーを開催し、文部科学省および関係機関が現在重点的に推進している施策や今後の方向性を確認しつつ、これら3つのプロジェクトの問題意識・現在の構想を持ち寄り、現在の施策との対応関係や意義、成果として期待される点を共有、プロジェクトを超えた連携の可能性を模索します。

【プログラム】

- 13:30-13:35 開会挨拶 山縣 然太郎（科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム プログラム総括／山梨大学大学院総合研究部医学域社会学講座 教授）
- 13:35-13:40 趣旨説明 ～ なぜ共進化か、研究公正における共進化の意義 ～
山縣 然太郎
- 13:40-13:50 発表 1 文部科学省における研究公正の取組み
小林 英夫（文部科学省科学技術・学術政策局研究環境課研究公正推進室長）
- 13:50-13:55 発表 2 JST における研究公正の取組み
高柳 元雄（国立研究開発法人科学技術振興機構 監査・法務部研究公正課 課長代理）
- 13:55-14:05 発表 3 APRIN における研究公正の取組み
上垣内 茂樹（一般財団法人 公正研究推進協会（APRIN）事務局長）
- 14:05-14:50 プロジェクトからの報告・構想発表
飯室 聡（国際医療福祉大学未来研究支援センター 教授）
中村 征樹（大阪大学全学教育推進機構 教授）
田中 智之（京都薬科大学病態薬科学系 教授）
- 14:50-14:55 - 休憩 -
- 14:55-15:40 パネルディスカッション
・モデレーター：山縣 然太郎
・パネリスト：上垣内 茂樹
高柳 元雄
飯室 聡
中村 征樹
田中 智之
- 15:40-15:45 Q&A
- 15:45-15:55 課題の整理と今後の展望 ・モデレーター+パネリスト+講演者
- 15:55-16:00 閉会挨拶 小林 傳司（国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター センター長）

（進行）黒河昭雄 科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム プログラム研究推進委員

【プロジェクト紹介】



「研究公正推進政策のための電子ラボノート実装ガイドライン作成を通じたガバナンス研究」

：令和2年度採択

研究代表者： 飯室 聡（国際医療福祉大学未来研究支援センター副センター長/教授）

＜プロジェクトの目標＞

研究倫理教育と不正に対する罰則（静的研究公正）による研究のガバナンスが限界を迎えつつある。その理由は二つある。一つは研究公正で取り組むべきターゲットの設定を誤っていること、もう一つは研究の公正性と科学に対する責任を研究者個人の倫理観のみ担保させようとしていることである。研究に対する疑義の多くは「故意の不正」ではなく、好ましくない研究活動である。それに対して研究倫理は無力である。研究に対する自己および第三者によるガバナンスに必要なのは、品質管理の考え方（動的研究公正）である。具体的に以下である。①データ管理の3原則（追跡可能性、再現可能性、プロセス管理）の理解 ②追跡可能性と再現可能性を可能にするためのデータ、メタデータの同定 ③ラボにおける研究プロセスの明確化 3原則に則った活動をするからこそ JST の掲げる「公正性」と「責任」の理念を具現化できる。本プロジェクトの目標は、静的研究公正から動的研究公正へのパラダイムシフトを引き起こすことで、研究者および研究管理者によるガバナンスのあり方を明確にすることである。



「研究分野の多様性を踏まえた研究公正規範の明確化と共有」：令和3年度採択

研究代表者： 中村 征樹（大阪大学全学教育推進機構 教授）

＜プロジェクトの目標＞

近年、わが国の研究機関において、研究公正を確保するための体制が整備されてきた。しかし、近年問題となることの増えてきた二重投稿や不適切なオーサーシップ等について、研究公正規範は一般論としては共通しているものの、どのような行為を二重投稿や不適切なオーサーシップとみなすか等、研究公正規範が具体的事例に適用される次元で分野によって対応が異なることが少なくない。その具体的な指針が、学協会等によって明示されていないことも多い。不適切な行為と公正な研究活動の境目が明確でない状況は、当事者の自覚がないまま研究不正等の問題が発生する背景ともなっている。本プロジェクトでは、研究公正の具体的な規範を研究分野の多様性を踏まえて明確化するとともに、そこで明確化した研究公正規範について研究倫理教育や研修等を通してその共有を図る仕組みを構築することを目指す。



「ライフサイエンスにおける誠実さの概念を共有するための指針の構築」：令和3年度採択

研究代表者： 田中 智之（京都薬科大学病態薬科学系 教授）

＜プロジェクトの目標＞

知的好奇心に基づいた研究や、画期的な治療薬の開発を目標とした研究では、研究不正は本来の目標から遠ざかる行為であるため、研究者のモチベーションが充足されている環境では研究不正の頻度は低いことが推察される。しかしながら、近年、撤回論文数は増加の一途をたどっており、そのうち研究不正が理由であるものは半数を超える。本プロジェクトでは、ライフサイエンス領域の研究者を対象として、研究者のモチベーションが損なわれる環境の特徴や、研究評価の問題点について、大規模な質問紙調査を実施し、健全な研究環境を形成する上で留意すべき事項をまとめたガイドラインを作成する。さらに文部科学省や学協会との連携、およびワークショップや SNS の活用といったボトムアップのムーブメントを組み合わせ、これらのガイドラインの研究コミュニティへの浸透をはかり、研究公正および質の高い研究の推進に貢献する。